

《2010年5月例会報告》

【日時】2010年5月20日（木）19:00～21:00

（その後「ルン」。～24:00.電車に乗って帰りました!）

【会場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】日独間選手育成システムの違いからみる、日本サッカー活性化の方法

【報告者】高田勝敏（元（財）東京都サッカー協会職員／元ベルリンサッカー協会研修生）

【参加者（会員）14名】阿部博一（日本サッカー史研究会） ★安藤悠太（日本スポーツ振興センター） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） ★小澤一郎（サッカージャーナリスト） 岸卓巨（中央大学大学院） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） ★幸野健一（三幸企画） 嶋崎雅規（帝京高校） 白井久明（弁護士） 高田勝敏（元（財）東京都サッカー協会職員／元ベルリンサッカー協会研修生） 高田敏志（町田高ヶ坂SCコーチ） 竹中茂雄（FC品川） 中塚義実（筑波大学附属高校） 藤田直樹（ビバ！サッカー研究会）

注) ★は2010年度からの新会員

【参加者（未会員）1名】庄司悟（DJ-SPORTS）

【ルンからの参加者】北原由 白髭隆幸

【報告書作成者】岸卓巨（ただしディスカッション部分のみ）

注) この日の発表内容は、高田勝敏氏のサイトに掲載されています。

<http://katsutoshi31.web.fc2.com/Top/Top.html>

日独間選手育成システムの違いからみる 日本サッカー活性化の方法

高田勝敏（元（財）東京都サッカー協会職員／元ベルリンサッカー協会研修生）

はじめに（中塚）

ベルリンから高田さんが帰ってこられました。現地での貴重な経験が、すでにまとまった形になっています。

ワールドカップが始まってしまうと月例会どころではなくなってしまう可能性があるため、話題がホットなうちに、本日、開催することになりました。

プレゼンテーション <日独サッカー環境>（高田）

プレゼンテーション部分の内容は高田勝敏氏のホームページに掲載されています。

ホームページでご確認ください。

<http://katsutoshi31.web.fc2.com/Report.html>

ディスカッション①

参加者：各地域トレセンで集められる25名程度のプレイヤーはセレクトされているのですか。

高田：そうですね。基本的に各地域のチームから選手の推薦があり、地域トレセンのコーチがセレクト

ションすることで25名程度を固めています。

参加者：同じ選手たちが毎週月曜日同じ場所へ行き、指導を受けるという形ですね。

高田：そうですね。

参加者：なぜ月曜日に練習が行われるんですか。

高田：月曜日に練習を行わないチームが多いことが理由の一つです。

参加者：25名のプレイヤーは、普段は別のクラブでプレーをしているということですね。

高田：普段は自分達のクラブでプレーをしています。

参加者：クラブでの練習頻度は。

高田：年代にもよりますが、U-12であれば週3~4回程度、あまり強くないクラブは週1回だったりもします。

参加者：ベルリンの中に地域トレセンはいくつあるのですか。

高田：地域トレセンは6つです。ベルリン全土を6つに分けています。

参加者：「将来サッカー選手に大成するために会得すべき個々の質・能力を獲得」とありますが、ドイツの地域トレセン育成システムのどの部分が大切だと考えていますか。

高田：トレーニング内容としては、正直日本とほぼ同じような内容を行っています。なぜならドイツも日本と同じように、スペインやフランスといった国から育成トレーニング方法を取り入れてプレイヤーたちに教え込んでいるのが実情だからです。ただ、ドリルや、しつこいまでに基本トレーニングを行っています。ドリブルやパス、ヘディング、シュート。こうした一つひとつの基礎的な練習を行っています。この地域トレセンの中で戦術的なものはあまり取り入れられていません。

参加者：ゲーム形式の練習よりも基礎を重んじているということですか。

高田：もちろんゲーム形式もありますが、基礎を意識付けした後でゲームを行うことが多いです。

参加者：日本では日曜日が試合で月曜が休みになるチームが多い。月曜日に集めて練習させられることに対してドイツでは何も問題はないのでしょうか。

高田：ベルリンに関しては土曜日の試合が多いです。日曜日に試合をやることもありますが、月曜日に練習を行うことにあまり選手は抵抗を感じていなかったように思えます。エリートコースの選手は、チームのトレーニングがあっても地域トレセンを優先することが多いです。

参加者：地域トレセンが行われる場所の中には交通の便が悪い所もあるとおっしゃっていましたが、親が送り迎えをしているのですか。

高田：ほとんどがそうですね。小学校も親が迎えにくることがほとんどです。低学年くらいまでの子どもを一人で帰宅させると親が罰せられることもあるようです。そういった面もあり、トレセンにもどちらかの親が送り迎えをするケースが多いです。

参加者：地域トレセン単位で試合をすることはあるのですか。

高田：あまりないのですが、年に何回かはコーチが選手を把握、ベルリン選抜チーム等へセレクトする意味で、全土の地域トレセンを集めて試合を組むことがあります。

参加者：11人制ですか。

高田：U-11～12に関しては8人制です。U-11～12は、リーグ戦でも11人制で行っていません。

参加者：先ほど9人制という言葉が出てきていましたが。

高田：それはU-13～14年代でやらせたいということです。

参加者：あえて11人制はやらせないということですか。

高田：そうですね。今U-12年代で、11人制でやっているところの方が珍しいと思います。

参加者：ドイツの小学校の授業は何時ぐらいに終わるのですか。

高田：基本的には午前中に終わります。しかし、午後までもやろう、小中一貫指導を増やそうというような教育システムの論議が進められています。また、ドイツ国内のほとんどの地域は小学4年生までなのですが、それが終わったら大学に行く準備や実技学校に分かれる形になるので、10歳ないし12歳のところで自分の進路を決めるのは良いのかどうかというのが議論的になっています。学校制度は変わっていくでしょう。

参加者：ドイツの小学校は、授業が午前中で終わると子供たちが帰るのが普通です。しかし去年や一昨年あたりから、午後も授業をやっているところもあります。それではスポーツができないため困るという親もいますが。

高田：ベルリンにもそのような学校はありますが、全体ではまだまだ改正されていないと思います。ベルリンでは全ての小学校が6年制で、午前中プラスアルファで帰らせています。学力の面で、もっと長い時間勉強させた方がいいという考えもありますが、特に競技スポーツをやりたい生徒は、スポーツ学校に通わせるという進路を政府が進めていきたいようです。

参加者：トレセンの費用はかかりますか。

高田：トレセンに関してはかかりません。

参加者：トレセンを行う場所はどこですか。

高田：基本的にはベルリン協会が人工芝もしくは天然芝のグラウンドを用意して、選手が集う形です。

参加者：ベルリンサッカー協会がやっていることは他の地域と同じようなものなのですか。

高田：そうですね。ドイツサッカー協会が育成システムを形作り、それを地域が実施するという形です。各地域に特に違いはありません。

プレゼンテーション <ドイツサッカー連盟の育成システム> (高田)

プレゼンテーション部分の内容は次のホームページに掲載されています。

ホームページでご確認ください。

<http://katsutoshi31.web.fc2.com/Report.html>

ディスカッション②

参加者：お金の問題は怎么样了か。ドイツのお金はどこから出ているんですか。

高田：ドイツ協会に関してはドイツ協会の収益が地域に渡る仕組みもあります。また、ベルリン市では、ベルリン協会職員の人件費が政府からある程度支給されるので、これは日本とは違うところだと思います。あとは登録料が基本的な財源となると思うんですが、その多くが地域に流れるので、その財源を使っています。

参加者：相対的に大きな割合を示すのは登録費なんですね。

高田：そうですね。これは日本も実際にそうです。日本代表やドイツ代表の収益も多いですけど、支出される部分も多いですからね。

参加者：私の知人がシャルケの U-17 に移籍したのですが、チームからお金が支給されています。育成選手でも支給されていて、月 250 ユーロぐらいもらっています。それはやはり選手の囲い込みという意味もあると思うんですが、育成年代にどの程度のお金が支給されているのですか。

高田：チームにもよるのですが、15 歳くらいまではあまり出ていないと思います。ただ、他の地域から選手を呼ぶ場合はやはりある程度支給することもあるでしょうし、基本的には 16~17 歳くらいからおこづかい程度は出るところもあると思います。

参加者：協会の組織を運営する上で、この仕組みを変えたら強くなるという話だったと思うのですが、個々のチームの話がありませんでした。日本ではチームと協会の運営の関わり方があまり上手くいっていない部分があると思うのですが、実際にベルリンにいかれてそのようなことを感じたことはありますか。

高田：ヘルタに関して言うと、ベルリンの地域トレセンの選手をヘルタが引き抜くという仕組みが出来上がっているのも、ヘルタのコーチが試合を見に来ることが多いですし、地域トレセンのサポートもしてくれているので、ヘルタは好意的に取り組んでいると感じます。他のチームのコーチも地域トレセンのコーチとして活動してくれることもあるので、結果としてお互いが Win-Win になっていると思います。ただ、この仕組みが日本でそのまま利用できるのかと言われたら必ずしもでき

るとは言えないと思います。ドイツでは選手の流動化に肯定的ですが、日本ではあまり良く思われない部分があったりもするので。

参加者：クラブごとの育成コンセプトの特徴はないのですか。

高田：正直、上のチームぐらいにしかなくて、下のチームではほとんどないですね。

参加者：しかし、何かしらの指針がなければ練習の方法がしっかりしなくなるので、ドイツ協会の指針を広める構図ですか。

高田：そうですね。もちろん強いチームは独自にコーチも沢山いて色々なコンセプトもあると思うのですが、街のチームに関してはそこまで進んでいるようには見られなかったですね。

参加者：ドイツサッカー協会にチーム登録するメリットは何なのですか。

高田：登録することでリーグ戦に参加できるというメリットがあります。

参加者：しかし、ブラジルなどでは日本よりもはるかにチーム登録数が少ないにもかかわらずレベルは高いですね。登録者数が必ずしもサッカーのレベルの基準にはならないと思います。また、かつてベッケンバウアーが「われわれがよい選手になれたのは、協会の仕組みや立派なマニュアルを無視したことだ」と冗談を言ったのを聞いたことがあります。結局育成はトップクラスの選手、ワールドカップで優勝する選手を作ることですね。街の子供たちが楽しくサッカーをするのは目的になっていないのではないかと思ったのですが。

注) 発表者の後日の調査により、ブラジルの選手／チーム登録数は日本より多いことが判明

FIFA の HP <http://de.fifa.com/associations/association=bra/countryInfo.html>

高田：トレセンに関しては、レベルの高い選手を育てるという目的になってしまう部分もあります。しかし、小さいグラウンドをドイツ全土に作るなど、トップレベル以外の選手に向けた施策もやっているのです、そういう意味では両立していると思います。学校でサッカーをやってもらうという取り組みもあったりします。

参加者：小さいグラウンドはどのように利用されるのですか。

高田：基本的には学校の敷地内、ないしはクラブの敷地内に作られており、学校でサッカー大会を開いたりクラブのコーチが指導者として学校生徒に教えに行くという方法があります。逆に、学校の体育館をクラブが使えるようにするという相乗効果もあります。クラブと学校が共同で何かを行うきっかけという位置付けになっています。

参加者：このプロジェクトの経費はどこから出ているのですか。

高田：2006年のワールドカップの収益の半分が充てられました。

参加者：このプロジェクトでは30億円で1000コート作られたということなんですが、1か所あたりの300万円はどのように使われたのですか。

高田：土地は学校もしくはクラブが用意するので、人工芝をひいたり周りに壁を立てたりゴールを置いたりといったかたちになります。

参加者：1 から土地を買おうとすると日本でもコストがかかると思うけど、土地が用意されていればそれほど難しいモノではないですね。

高田：そうですね。ドイツ協会や企業が協力することで、経費を少しでも浮かせることができています。

参加者：トップレベルでプレーできる選手は上を目指すことでサッカーを続けると思うのですが、それ以外の選手もサッカーを続けていく要因は何かあるのですか。

高田：やはりチームがたくさんあって、選手がレベルに合ったチームを選べるというのが一番大きいと思います。大人になっても自分のレベルに合ったチームを選ぶこともできます。よって、レベルが高い、キツイなどを理由にサッカーをやめてしまう人はあまりドイツでは見られないと思います。

参加者：移籍についてですが、自宅からとてもじゃないけど通えないチームに移籍するのは何歳くらいから見られるものなのですか。

高田：私が知る中では、13歳でベルリンからホッヘンハイムに移籍した選手がいました。その時は選手だけでなく、その親の仕事の面倒もチームが見ています。

参加者：13歳は学校の変わり目ですね。

高田：そうですね。移籍に関しては特に学校の変わり目などを気にしない傾向がありますが。

参加者：それに関してはポジティブな面とネガティブな面があると思うのですが。

高田：もちろんサッカーで成功すればそれはポジティブですが、そうでなければ選手は挫折感を感じるようになります。ただし、日本とは異なり、皆が一様な教育を受けるわけではなく、個々の能力に応じて実務学校等の選択肢があるので、そこで職業訓練を受け手に職をつけることで、サッカー選手として挫折したからと言って路頭に迷うといったことはないシステムがあることが背景にあることも、ドイツの子どもたちをめぐる環境で注目に値する点と言えるかもしれません。

参加者：日本の各都道府県の協会がもっと頑張らなければならないということはよくわかるんですが、日本サッカー協会を解体して縮小しなきゃいけない理由がよくわかりませんでした。

高田：そうですね、でも実際ドイツ協会やイングランド協会は代表の活動以外はほとんどしていません。実際に活動しているのは、それぞれの地域協会なのです。財源や人材に関する権限も、地域の人間が持っています。日本サッカー協会は、何事も自分達でやりすぎている傾向があり、実際地方の協会があまり機能していない部分もあるのではないかと思います。

参加者：日本サッカー協会ぐらい大規模なものではなく、そしてそれ相応の仕事をしているのかという点に疑問があります。地方分権することには非常に賛成です。

参加者：JFA の皆さんはドイツのシステムを認知しているにもかかわらず、どうしてドイツのように取り組もうとしないのでしょうか。

高田：JFA は日々の仕事に追われていて、大きなことを考えることができない状況も問題の一つだと思います。

参加者：川淵さんのように強力なリーダーシップを持った人が地方に出向くことができれば良いのではないかと思います。また最近では、勢いのある地域やJリーグのクラブも出てきているので、そのようなものを核にして地域発信でやっていったらよいというのは私も賛成です。

参加者：登録料は地域のクラブにとってとても高く、それがほとんど東京に吸い上げられてしまい、地元にはほとんど残らないのです。このほとんど官僚組織がJFAの現状ですよ。

参加者：協会の社員のステータスに関わるマネジメントを含めた協会のレベルアップが必要だと思います。ドイツやイタリアはとても上手だと思うけど、日本は上手くない。

参加者：地方分権を進めようとする、そこでマネジメント能力などを発揮する場ができる。国の政治ではできないことをサッカーで始めたほうが、地方が育っていくのだと思います。

感想

庄司：ドイツに33年住んでいて、1年前に帰ってきました。今の日本の目先がドイツやスペインを始めとするヨーロッパに行きがちじゃないですか。私は、ヨーロッパから日本や東京を見てもらうべきだと思います。日本の組織を見たら、ヨーロッパ人は驚きますよ。ヨーロッパになくて日本にあるものもあると思うんです。私自身、去年日本に帰ってきて、日本の現状を見たときに、まだ日本も捨てたもんじゃないぞという思いを物凄く感じました。だから、弱いところを強くするというよりも、むこうにないモノを確実にしていくことも重要だと思います。それと並行して国の問題を洗えることができればもっと良くなると思います。あまりヨーロッパの方に目を向けすぎないようにというのが僕の意見です。

高田：つたない発表でしたが、皆さんからご意見をいただけて、私の方も色々と考えさせられる点もありました。ありがとうございました。